

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(2年計画の2年目)

## 1. 研究課題

生きる営みと環境問題

Living Activities and Environmental Issues

## 2. 研究代表者氏名

岩城 卓二

IWAKI, Takuji

## 3. 研究期間

2023年4月-2025年3月(2年目)

## 4. 研究目的

「環境問題の社会史的研究」班(2020・4・1～2023・3・31)は、日本の近世から現代までの環境問題について、とくに環境問題に関わる社会運動を中心に、運動が起こった現場の社会構造に注目しながら被害の現場に生きる住民の立場から環境問題とは何かを考えることを目的とした。本研究班は、その成果と課題をふまえ、山野河海におけるヒトの生きる営みを実証的に明らかにし、17世紀以来のヒトの生きる営みが、いつ、何を契機に変容し、どのような要因によって環境問題として可視化されるのか、あるいは可視化されないのかについて明らかにしていく。日本列島に限らず世界の諸地域を対象とするが、「環境先進国」という前近代日本評価の再検討と戦後の高度経済成長の位置付け、人びとの環境認識、都市と農村の関係性、環境問題につながる山野河海を開発する側の論理など「生きる営み」に重点を置いて実証的に明らかにし、環境問題とは何かについて考えていただきたい。

The "Social Historical Study of Environmental Issues" group (April 1, 2020 - March 31, 2023) examined environmental issues in Japan from the early modern period to the present day, focusing in particular on social environmental movements, taking into account the social structure of the actual sites where the movements evolved, and considering what the environmental issues are from the perspective of the residents living in the affected areas. Based on the results and the questions raised, this research group will empirically clarify human activities in the mountains, fields, rivers, and oceans, and identify when and at what point human activities have changed since the 17th century, and what factors make them visible or invisible as environmental issues. Our research is not limited to the Japanese archipelago but covers various regions of the world. We would like to reexamine Japan's pre-modern reputation as an "environmentally advanced country," the positioning of its rapid

postwar economic growth, people's perception of the environment, the relationship between urban / rural areas, and the logic of those who develop the mountains, fields, rivers, and oceans that lead to environmental problems, with an emphasis on "living activities," to empirically clarify what environmental issues are.

## 5. 本年度の研究実施状況

2023 年度から 2 年間の計画で実施した本研究班は、最終年度となる本年度、8 回の研究会を開催した。報告は、①戦後広島県の対米輸出用冷凍カキをめぐる「清浄海域」の誕生と変遷、②高度経済成長期における温泉地の地域経済や地域社会の変化、③経済成長による灌漑用の新たな水源開発が、土壤・水質汚染や氷河の減少・消失などの環境問題を引き起こすこと、④環境保全と帝国主義の関わりや、学知を介した宗主国と植民地の繋がり、置き去りにされた住民の立場、⑤福島第一原子力発電所事故を「表象の危機」として捉える必要性、⑥物質が自然物から人工物に変えられ、ふたたび自然界に拡散していくまでを追うことで人間と生物たちが生きた環境を考える視点の提起、⑦「パブリック・ヒストリー」の概念による「公害地域再生」と「公害経験の継承」をつなぐ議論の可能性と課題等々、環境問題と生きる営みを連関させた報告、それに必要な新たな視点の提起が行われた。

## 6. 本年度の研究実施内容

- 2024.4.25 広島カキの戦後環境史と日米間の貝類衛生問題：「清浄海域」に注目して 発表者 Kjeii Ericson 京都大学 学祭センター・文学研究科
- 2024.5.13 温泉資源をめぐる戦後史－高度経済成長期を中心に－（「高度経済成長期の生活史」班との共催） 発表者 高柳友彦 一橋大学経済学研究科
- 2024.7.21 福島の動物たちは世界をめざす 震災後視聴覚作品における動物表象についての一考察 発表者 Irina Holca 東京外国语大学国際日本学研究院
- 2024.10.28 猫いらずの世界史 発表者 瀬戸口明久 京都大学人文科学研究所
- 2024.11.18 1950～60年代中国における水源開発と環境負荷－氷雪灌漑と汚水灌漑を中心にして 発表者 井黒忍 大谷大学文学部
- 2024.11.27 Disobedient Buildings: An Visual Ethnography of Tower Blocks in the UK(「高度経済成長期の生活史」班との共催) 発表者 Inge Daniels University of Oxford
- 2024.12.2 日本統治期の澎湖島における「森林破壊」論争と植民地政策 発表者 米家泰作 京都大学文学研究科
- 2025.3.28 郊外地域再生、公害経験の継承、パブリック・ヒストリー実践 発表者 除本理史 大阪公立大学経営学研究科

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 8. 研究班員

### 所内

岩城卓二、石井美保、KNAUDT,Till、小関隆、小堀聰、酒井朋子、瀬戸口明久、高木博志、直野章子、平岡隆二、福家崇洋、藤原辰史、岡澤康浩

### 学内

石川登(東南アジア地域研究研究所)、岩島史(経済学研究科)、米家泰作(文学研究科)、岡安裕介(国際高等教育院)、ERICSON KjellDavid(文学研究科・学際融合教育研究推進センター)  
学外

青木聰子(東北大学文学研究科)、HOLCA, Irina(東京外国語大学)、齋藤幸平(東京大学総合文化研究科)、高橋美貴(東京農工大学大学院農学研究院)、武井弘一(金沢大学人間社会研究域学校教育系)、町田哲(鳴門教育大学大学院学校教育研究科)、松嶋健(広島大学大学院人間社会科学研究科)、池田さなえ(京都府立大学文学部)、唐澤太輔(秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科)、除本理史(大阪公立大学大学院経営学研究科)、落合功(青山大学経済学部)、関礼子(立教大学社会学部)、田中雅一(国際ファッショント専門職大学国際ファッショント学部)、比嘉理麻(沖縄国際大学総合文化学部)、河野未央(武庫川女子大学文学部)、林美帆(岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター)、橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館)、木村あや(ハワイ大学マノア校社会学部)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 <b>(必須)</b>	受入人数				延べ人数					
		総計	海外研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(0)	(0)	(0)	(0)		(0)	(0)	(0)	
人文研所属 (内女性)	1	13	1	1	0	0	68	3	4	0	0
京大内 (人文研を除く) (内女性)	5	5	1	1	0	0	9	4	3	0	0
国立大学 (内女性)	7	7	0	0	0	0	19	0	0	0	0
公立大学 (内女性)	3	3	0	1	0	0	3	0	1	0	0
私立大学 (内女性)	6	6	0	0	0	0	19	0	0	0	0
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0
民間機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関 (内女性)	1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0
その他 ※ (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	24	36	2	3	0	0	124	7	8	0	0
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	10		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	14		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	環境と公害	1	2024.4	「困難な過去」と経験継承の課題	除本理史
2	毎日新聞	1	2024.5	電源3法50年 「原発」根本からの検証を	小堀聰
3	文化人類学	1	2024.6	沖縄の基地反対運動と命のアナキズム－軍事化に抗する生き物たちの〈生〉の理論	比嘉理麻
4	人文学報	1	2024.6	青空がほしい再訪：高度成長期戸畠の婦人会による反公害運動の道のり	小堀聰
5	人文学報	1	2024.6	レールに身体を横たえて——鉄道自殺の技術論	瀬戸口明久

6	第 10 回震災問題研究交流会報告書	12	2024.7	原発はどのように人々を分断するのか(2)——立地計画がもたらす「ふるさと損傷」	青木聰子
7	鈴木淳・山口輝臣・沼尻晃伸編『日本史の現在 6 近現代 2』	1	2024.7	公害と環境史	小堀聰
8	『山田慶兒著作集 第七巻—科学論（近代篇）・欧文』臨川書店	1	2024.7	解題	平岡隆二
9	大阪社会運動協会編『大阪社会労働運動史 第 10 卷』	1	2024.7	電力・ガス・水道	小堀聰
10	日本民俗学	1	2024.8	禊ぎと産靈 一湯治文化の背景にある世界観について—	岡安裕介
11	歴史学研究	1	2024.10.	日本産淡水魚消費論—全体史に向けた試み—	橋本道範
12	環境と公害	1	2024.10	被害救済のあり方—新潟を中心に（特集①水俣病をめぐる裁判の動向—ノーモア・ミナマタ第 2 次訴訟を中心に）	関礼子
13	毎日新聞	1	2024.10	新幹線開業 60 年 受益の裏にあった受苦	小堀聰
14	大原社会問題研究所雑誌	1	2024.11	被害回復に向けた賠償・復興政策の問い合わせ直し：「闘争」と「継承」の両側面から長期的復興課題を考える	除本理史
15	大原社会問題研究所雑誌	1	2024.11	ふるさとの「復興」とは何か—避難を終えてなお残る被害に抗う	関礼子
16	新社会学研究	2	2024.11	社会学は笑う、環境物語—手塚治虫の『窓』から	関礼子
17	部落問題研究	1	2024.12	複線型復興に向けて：福島原発事故の教訓から考える	除本理史

18	社会と倫理	1	2024.12	公害問題における責任論再考：公害訴訟の和解がもたらした理論的・実践的課題を中心に	除本理史
19	環境社会学研究	8	2024.12	地域社会の痛みを聞き取るということ——芦浜原発反対運動をめぐる語りの受容を事例に	青木聰子
20	経済	1	2025.2	「困難な過去」に向き合い、「地域の価値」をつくる：倉敷市水島の「環境再生のまちづくり」	林美帆・除本理史
21	企業家研究	1	2025.2	書評 中瀬哲史著『日本の電力システムの歴史的分析—脱原発・脱炭素社会を見据えて—』	小堀聰
22	藤原辰史・香西豊子編 疫病と人文学——あらがい、書きとめ、待ちうける	1	2025.2	「軍事空間」としてのパンデミック——COVID-19とマラリア	瀬戸口明久
23	『阿波学会紀要』65	1	2025.3	嵯峨山のクマと徳島藩—熊胆・熊皮の御用を中心に—	町田 哲
24	『関西の隠れキリスト教——発見——茨木山間部の信仰と遺物を追って』人文書院	1	2025.3	茨木へのキリスト教伝来—その由来と展開	平岡隆二

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文

	雑誌名	インパクト ファクター (数値)	掲載 論文数	掲載 年月	論文名	発表者名
1	Environmental History	0.6 (2023 年度)	1	2025.1	Seed Oyster Inspection, Matsushima Bay (circa 1958)	Matthew Morse Booker, Kjell David Ericson

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	空気はいかに「価値化」されるべきか	東京大学東アジア 藝文書院 編	2025.2	東京大学出版会	
2	黄土地帯の環境史：灌漑 の技術と水利の秩序	<u>井黒 忍</u>	2024.12	研文出版	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 研究成果公表計画および今後の展開等

2025 年度前半に、成果報告論文集執筆者による執筆内容の提示、それをふまえた班長との調整を行い、その後、年度末までに原稿を提出。2026 年度の刊行助成を利用して、成果報告論文集を刊行する。